

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（心理学）	氏名	藤田 文
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目 遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達： 交代制ルールの産出とその主導者を中心に			
論文審査担当者 主査 教授 青木多寿子 審査委員 教授 森 敏昭 審査委員 教授 杉村伸一郎			
〔論文審査の要旨〕 本研究では、遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達が検討された。関係調整とは、「円滑な社会的相互作用を行うために、集団内の対人関係およびコミュニケーションに働きかける能力」であり、「関係重視」「関係維持」「葛藤への対処」の三要素から成ると定義される（藤本・大坊, 2007）。幼児期に仲間との関係調整の能力が欠如すると、青年期の社会的不適応のリスクとなることが示されており（前田, 2001）、幼児期からの関係調整の発達を明らかにする本研究は、現代社会において重要なテーマだと言える。 従来、幼児期の仲間との関係調整の研究は、関係調整が悪化したいざこざ場面の「葛藤への対処」のみに注目しており、奪われた遊具を奪い返すための一時的な関係調整しか取り扱っていなかった。つまり先行研究は、遊びの中に他者を取り込んで遊びを共有する「関係重視」や、遊具と同時に他者の行動にも注意を向けて他者と継続的に遊びを展開するための「関係維持」の要素が不足しており、不十分である。 そこで本研究では、「関係重視」や「関係維持」の要素を含む幼児の仲間との関係調整の発達を検討した。不規則で予測不可能な反応が多い仲間関係の調整のためには、規則的な行動のルールの産出が重要な要因になると考えられる。従って本研究では、子どものルールの産出が仲間との関係調整の足場かけになると仮定して関係調整の発達を検討した。子どもの社会的遊びが、平行遊びから協同遊びへと発達することを考えると、産出されるルールは、遊具を平行的に使用する同時制ルールから遊具の共有度が高い交代制ルールへと発達すると予想される。 確かに同時制ルールでも関係調整はできるが、このルールでは自分が遊びを実行する間に他者の行動に注意を向けられない。一方交代制ルールでは、順番を待つ間他者の行動に注意を向けることが可能になる。他者の行動をよく見ることで、他者を遊びに取り込み、他者との関係調整がより発展していくと考えられる。従って本研究では、より関係調整の足場かけとなりうる交代制ルールの産出を中心に分析を行った。 また、仲間との関係調整をうまく行うためには、ルールを産出することに加えて、他者を配慮した上でそのルールを主導的に実行することが必要だと考えられる。従って、本研究では、ルールの主導者にも注目して検討を行った。			

以上のことから本研究の目的は、遊び場面を設定し、幼児の仲間との関係調整の発達を、交代制ルールへの産出とその主導者の観点から検討することだった。加えて、「もの」(遊具)と「人」(他者)の要素を変化させる場面を設定し、ルール産出の難易度を変化させて、幼児の関係調整に関わる要因を明らかにすることだった。

研究1では、ビー玉や積み木など自由度の高い遊び場面、研究2では遊具の資源量の異なるボーリングゲーム場面、研究3から5ではゲームの難易度や仲間の人数が異なる魚釣りゲーム場面、研究6では遊びの質が異なるお絵かき遊び場面を設定した。いずれの研究でも、幼児を二人組や三人組にして一緒に遊んでもらい、その様子をビデオ録画して、遊具の使用に関するルールの産出と主導者を分析した。

様々な遊び場面における幼児の行動を分析した結果、次のような年齢差と性差が示された。(1)4歳児から5歳児にかけて、同時制ルールから交代制ルールへ発達すること、(2)交代制ルールの規準は不明確なものから明確なものへ発達すること、(3)交代制ルールの規準が明確な場合にいざこざの出現が少ないこと、(4)他者へ提案したり、自分から遊具を渡したりするなど他者配慮的にルールを主導する関係調整ができるように発達すること、(5)特に5歳女児では、交代の規準が明確で他者配慮的な関係調整ができ、女児の方が仲間との関係調整の発達が早いことが明らかになった。

従って、幼児の仲間関係において、規準が明確な交代制ルールが足場かけとなって、他者を遊びの中に取り込む関係重視の側面や、遊具を継続的・安定的に共有することができる関係維持の側面が発達することが示された。交代制ルールでは、次に誰が実行するかという他者の行動を予測でき、また他者の行動を見るチャンスが増える。交代制ルールが産出されることで、他者の行動をよく見る機会の増加につながり、さらにルールに他者を取り込む役割を果たし、他者との関係調整がうまく行われるようになると考えられる。

また、幼児の関係調整の未熟さについては、エピソード分析で記述された。曖昧な規準やランダムな規準を用いたり、最初は間接的に要求するが次第に直接言語的に要求し、最後には力づくで遊具を奪ったりするケースが見られた。相互交渉を時系列的に分析することで、関係調整のプロセスを明らかにして、女児の他者配慮的な関係調整と男児の不公平な関係調整という性差や個人差を詳細に記述することができた。

従来の研究は、いざこざの解決という一時的な関係調整のみに焦点を当てていたが、本研究はルールの発達に注目し、遊びの中に他者を取り込み、遊具を継続して共有する関係重視や関係維持を含めた関係調整に焦点を当てた点に意義がある。規準が明確な交代制ルールが関係調整に果たす足場かけの役割を明らかにした点も新しい知見である。

また本研究では様々な遊び場面を設定することで、幼児の関係調整には、遊具の自由度や資源量、ゲームの困難度、仲間の人数の要因が影響を及ぼすことが明らかになった。この知見を踏まえて、保育場面において仲間との関係調整の能力を促進するために、ゲーム遊びを導入すること、その際に物理的環境や人的環境を子どもの発達に合わせる重要性であることを指摘した点で、教育的に応用可能な示唆を与える研究となった。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(心理学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成26年2月17日